

一〇月二三日（日）

「つまり、二人の出会いがキツカケなんだ」

沙綾さんは、私と哲朗さんを指で差しながら言った。哲朗さんはキョトンとした表情で私の方を見るけど、私も詳しいことは知らない。お誕生日席っぽいところに座っている晃兄に視線を送る。

彼は私の視線をスルーして、沙綾さんの言葉に「ま、そういうこと」と答えた。

「御膳立てから先は、本人たちのアレだけど」

「でも、それがこうなってるんだから、大したもんよ」

晃兄は自慢げに「まあね」と鼻を膨らませた。沙綾さんは仕切りに、凄いだの、偉いだのと彼を持ち上げる。この間まで「距離感が分からない」と悩んで周りに相談までしていた割に、凄まじい馴染みっぷり。

もしかして、一兄と哲朗さんにわざわざ時間を合わせてもらってまで、こういう会を開かなくても良かったりする？ 私が沙綾さんの隣に座る一兄に視線を送ると、彼は小首を傾げた。隣の哲朗さんも、何となく居心地が悪そうにビールジョッキを傾けている。

完全に蚊帳の外の我々を他所に、沙綾さんと晃兄は意気投合して、二人で仲良く喋っている。一々聞き耳を立てて話を聞くのも面倒臭くなってきた。彼女らには聞こえないよう、声を抑えて「なんか、ごめんね」と哲朗さんに言った。

「別に良いよ。兄弟の集まりに混ぜてもらって光栄だよ」

彼はそう言いながら、私に微笑んでくれた。一兄にも「忙しいのにごめんね」とヒソヒソ言うのと、「良いって。気にするな」と答えてくれた。

「オレより、二人の方が忙しそうじゃないか」

一兄の言葉に、哲朗さんは苦笑いを浮かべながら、「まあ、おかげさまで」と答える。

「ヒートアップしちゃった先生の特訓は、その後どうなんだ？」

「全然終わらない。お陰でバイトとか全然行けてなくて」

隙あらば課題を詰め込んでくるお陰で、写真屋のバイトどころか、Zサイズのオフィスにすら中々顔を出せていない。船木さんからは、「暇ができたなら、いつで

もおいで」とは言ってもらえてるけど、流石にそろそろヤバい気がする。

実践的なテクニク、スキルを中心に鍛えてもらって入るものの、現場や実践で試してみないと血肉にならないところもある。その辺りの相談も、近々先生とやらなきやな。

「アレ、じゃあ二人が顔を合わせるのはいつ振り？」

「チラッと顔を合わせてはいますけど……」

哲朗さんが上を見ながら記憶を辿っている。Zサイズのオフィスに出入りはしているから顔は合わせているけど、こうやって落ち着いて食事をするのは、後期の授業が始まって以来かもしれない。

「なんだかんだで、晃と沙綾に感謝だな」

一兄の視線は、勝手に盛り上がっている二人の方へ向けられる。哲朗さんは納得した様子で「そうですね」と頷いた。私は微塵も納得できていない。

「お待たせしました。涙巻きです」

店員さんが、刻みワサビがたっぷり乗った細巻きを運んできた。盛り上がっていた二人も動きを止め、運ばれてきたお皿に目をやった。

「え、何それ」

晃兄が呟いた。私が「涙巻きだけど」と答えると、沙綾さんが「みいちゃん、それ食べんの？」とちよつぴり引いた様子で言った。

「流石にそれは、ちよつと減らした方がいいんじゃないか？」

一兄まで、上に乗ったワサビを箸で落とせと合図する。そこまでやられると、このままかぶりつきたくなる。思い切つて、一つ口に入れた。強烈な刺激が鼻を駆け抜けていく――。

初出 令和三年一〇月二六日 noteにて公開